

黥面土偶から黥面絵画へ

From Tattooed Clay Figurines to Pictorial Representations of Tattooing

設楽博己

はじめに

① 黥面土偶から黥面絵画へ

② 黥面絵画 C の新資料

③ 鳥装の戦士とイレズミ

④ 畿内地方の空白

おわりに

【論文要旨】

弥生時代には、イレズミと考えられる線刻のある顔を表現した黥面絵画が知られている。いくつかの様式があるが、目を取り巻く線を描いた黥面絵画 A、目の下の線が頬を斜めに横切るように下がった黥面絵画 B、額から頬に弧状の線の束を描いた黥面絵画 C がおもなものである。それぞれの年代は弥生中期、中～後期、後期～古墳前期であり、型式学的な連続性から、A→B→C という変遷が考えられる。A は弥生前期の土偶にも表現されており、それは縄文時代の東日本の土偶の表現にさかのぼる。つまり、弥生時代の黥面絵画は縄文時代の土偶に起源をもつことが推測される。黥面絵画には鳥装の戦士を表現したものがある。民族学的知見を参考にすると、イレズミには戦士の仲間入りをするための通過儀礼としての役割があったり、種族の認識票としての意味をもつ場合もある。弥生時代のイレズミには祖先への仲間入りの印という意味が考えられ、戦士が鳥に扮するのは祖先との交信をはかるための変身ではなかろうか。畿内地方では、弥生中期末～後期にイレズミの習俗を捨てるが、そこには漢文化の影響が考えられる。その後、イレズミはこの習俗本来の持ち主である非農耕民に収斂する。社会の中にイレズミの習俗をもつものともたないものという二重構造が生まれたのであり、そうした視点でイレズミの消長を分析することは、権力による異民支配のあり方を探る手掛かりをも提示するであろう。